



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3 / TEL 045-774-9861 洋光台
バプテスト教会内 (蛭川明男牧師) / ●世話人代表 金子 敬
●事務局長 吉高 叶 (栗ヶ沢バプテスト教会 TEL 047-341-9459)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

和解への決断

佐々木和之

ささき かずゆき

赦し、愛する決断をした人々。
償いの道を歩む決断をした人々。
引き裂かれた関係の修復のために、
歩みだしている人々が、ここにいます。

皆さま、日本の猛烈に暑い夏をいかにしのいでおられるでしょうか。ルワンダは今、乾期のために湿度が低く、からっとして快適な気候です。今日のキガリの天気予報は曇り時々晴れ、最高気温は28度、最低気温は11度で、夜間はかなり冷え込みそうです。

ここ最近、ルワンダにいながら日本の脱原発運動の行方を注視しています。7月16日には東京で17万もの人々が原発廃止を訴えたことを知り、私も勇気をいただきました。脱原発を求めろうねりがさらに大きくなり、日本もドイツのように“新たな道に踏みこむ勇氣”(柄谷行人)を得ることが出来るように祈っています。

■新しい“償いのプロジェクト”がスタート

7月9日、“償いのプロジェクト”が、東部県ブグセラ郡ンハラマ村(首都キガリの南方約30キロ)でいよいよ始まりました!

リーチは昨年(2011年)の11月末以来、ンハラマ村に住む元受刑者(虐殺罪のために拘禁

刑や公益労働刑に服した後、社会復帰を許された人々)を対象に、“癒しと和解”や“修復的正義”に関するセミナーを続けてきました。その最後として5月に実施したセミナーの最終日、参加者の多くが“償いの道”を歩む決意をしたのです。

5月2日から4日の3日間、リーチのスタッフであるフィデル牧師との二人三脚で、ンハラマ村在住の元受刑者34名(男性30名、女性4名)を対象に“修復的正義セミナー”を実施しました。その目的は、以前キレヘ郡で実施した時と同様(「ウブムエ」6及び7号参照)、虐殺の加害者である参加者のひとりひとりが自らの罪責に向き合い、償いの道を歩み出すように励ますことでした。

今回もこのセミナーのハイライトは、虐殺生存被害者の証言を聞いた第2日目でした。ニヤマタ(ンハラマの隣町)で石鹸作りに取り組む女性協働グループ「トゥリ・ウムエ(私たちはひとつ)」(「ウブムエ」16号参照)のメンバーである2人の女性にジェノサイド当時の経

験、そして、その後どのように歩んでこられたのかについて語っていただきました。このお二人は、「トゥリ・ウムエ」の中心メンバーであるとともに、癒しのセミナー「エンパワー」（前号参照）のファシリテーターとしても活躍されている方々です。

そのうちのお一人、イマキューレ・ムカニャルワニャさんは、今はニヤマタの借家に住んでいますが、以前はンハラマ村で夫と5人の子どもたちと一緒に暮らしていました。1994年4月、ンハラマ村でもツチに対する襲撃が始まり、彼女の家族は別々に逃げまどうことになりました。その時以来、夫と2人の子どもたちを彼女が目にしたことはありません。イマキューレさん自身は、まだ1歳にならない娘をおぶって湿地帯に逃げ、パピルス の 茂みの中で息を潜めました。そしてなんと、そのとき臨月だった彼女は、2週間後にその茂みの中で一番下の娘を産み落としたのでした。

極度の困窮と恐怖の数週間を経た後、彼女は、2人の娘と共に生き残りました。そして、しばらく後、他の場所で生き残った2人の男の子たちと再会したのでした。新政府が樹立され安全になったということでンハラマ村に戻ってみると、家族と共に暮らしていた家は、修復不可能なまでに破壊され、畑も荒らされていたと言います。

イマキューレさんは、これらの壮絶な体験と家族を失った悲しみについて語った後、今度はリーチの活動を通して少しずつ元気を取り戻したこと、そして、加害者を家族に持つ女性たちとも少しずつ仲良くなり、今では、一緒に石鹼工房で働くなどしながら、「家族」として助け合って生きていることを静かな口調で話されました。

そのイマキューレさんに司会者役のフィデルさんが、「この人たちに何か訴えたいことはありますか?」、と尋ねました。すると彼女は、「まだ遺体の見つか

っていない犠牲者が大勢います。彼らをどこに埋めたのか教えてください。いつかきちんと埋葬が出来るように」、と訴えられたのでした。ジェノサイドの関与者を裁くための民衆法廷「ガチャチャ裁判」は既に終了しているのですが、イマキューレさんは、自分の夫や子どもたちがどのように殺され、彼等の遺体がどこにあるのか知ることができずにいるのです。その彼女が、参加者たちに向かって、「何か手がかりを教えてください」、と訴えたのでした。

その後、「今、加害者たちにどのような気持ちを抱えていますか」、とフィデルさんがイマキューレさんに尋ねました。すると彼女は、目の前の加害者たちに向かって、「私はあなたたちを愛しています。私たちみなは、神様が創られた家族だからです」、と穏やかな表情で語りかけたのでした。



＜エンパワーでのイマキューレさん＞

イマキューレさんにとって、ジェノサイドは決して過去の事柄ではありません。彼女の村で虐殺に参加した村人たちの多くはガチャチャ裁判で罪の告白と謝罪をしたものの、未だに「隠されている真実」があるのです。まだ罪を認めていない人たち、謝罪していない人たちも大勢いるはずですが、にもかかわらず彼女は、加害者たちに彼らを「包み込む言葉」を語りかけたのでした。

彼女が語っている間、参加者たちは一語一語に全神経を傾けているかのように、

ベンチから少し身を乗り出し、息を飲むように聴いていました。証言が終わると、今度は多くの参加者たちが彼女の所に進み出て、両手で彼女の手を握り、口々に感謝の気持ちを伝えていました。

以前書いたことではありますが、今回のセミナーであらためて確信したことをあらためて書き留めておきたいと思います。それは、犯罪加害者が、自分個人の罪を認め、心から赦しを請い、罪責を担って生きる決意をすることが出来るようになる鍵は、「赦されること」、あるいは「赦されていることを本当に知ること」にある、ということです。

キリスト教をバックボーンとするリーチが加害者のために実施するセミナーでは、まず神の裁きと赦しについて学びます。今回も、旧約聖書のエゼキエル書18章から、「お前たちが犯したあらゆる背きを投げ捨てて、新しい心と新しい霊を造り出せ。... どうしてお前たちは死んでよいだろうか。私は誰の死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ」(30-32節)との、神から私たち人間への熱いメッセージを、そして、キリストによる罪の赦しについて共に学びました。その上で、キリストへの信仰に基づき、赦しと和解への道を歩んでいる女性たちの証言を聴いたのでした。

イマキューレさんの「私はあなたたちを愛しています。私たちはみな神様が創られた家族です」との言葉は、罵倒されても仕方がないと思っていた参加者たちの心を激しく揺さぶったに違いありません。人前では動揺しているところを見せることがほとんどないルワンダ人の彼らが、目に涙を浮かべながら聴いていたのですから。加害者である自分たちをも包みこむ彼女の優しい言葉と振る舞いを通して、彼らは神の愛と赦しが真実であり、自分たちに注がれていることを知ったのです。心からの謝罪と罪責を担う決意は、この本物の愛と赦しへの応答として起きるのです。

これから数か月の間、ンハラマ村でイマキューレさんのための家造りが続きます。参加者は同じ集落に住む28名の虐殺加害者(男性24名、女性4名)で、「今は乾期だから、力を合わせて一気に家を建てあげたい」と皆やる気満々です。

引き裂かれた関係の修復のために、今、苦闘しているイマキューレさん、彼女の子どもたち、そして家造りに取り組む方々と共に、平和と和解の主イエス・キリストがこれからも歩んでくださるように、そして、この修復的正義の取り組みが、数千人が犠牲になったこの村の人々の和解への第一歩となるようにお祈りください。



＜建設現場となる土地にて＞

■ “深化する償いの家造り”

7月13日、元受刑者によるボランティアでの家造りが始まってからまる3年になるキレヘ郡を、日本国際飢餓対策機構のスタディーツアー参加者6名と一緒に訪ねました。キレヘ郡では現在、3つのグループ(計70人程度の元受刑者が参加)が家造りに取り組んでいますが、今は農閑期にあたるため、それぞれのグループが週に5日のペースで働いています(農繁期には週に2日)。今回は、タデヨ・ハビヤカレさん(「ウブムエ」17・18号参照)のグループが働くルガンド集落を訪ね、私たちも「バケツ・リレー」の要領で日干しレンガ用の泥を運ぶなどのお手伝いをしました。

このグループにとって8軒目となる家造りの現場には、一緒にレンガ造りに取り

組む受益者のヴィオレッタさんの姿もありました。彼女は、この村で起きた虐殺により両親を殺され、虐殺孤児となった女性です。聞きそびれましたが、年齢は20代前半でしょう。家造りが始まって既に1ヶ月になりますが、彼女は元受刑者の男性たちと時折言葉を交わしながら、とても自然に作業に参加していました。

つい最近まで、タデヨさんたちは、ルガンド集落に住む虐殺生存被害者の人たちのために家造りを続けてきました。それを成し遂げた彼らは、今度は、18年前のジェノサイドで家族を殺された後、生き残った親類縁者を頼って他村へ移り住んだ「虐殺孤児」を探し出し、彼・彼女らのために家造りを始めたのです。



＜泥の「バケツリレー」に参加＞

この新しい展開の経緯をタデヨさんに尋ねると、彼はこう答えました。「私たちのせいで孤児になり他の村に移り住んだ彼らは、この村に両親が残した土地を持っています。家を建てて住む場所を確保できれば、よそにいるよりずっといい暮らしができる。そこで彼らの所に訪ねて行き、この活動を紹介し、村に戻ってきてもらうように呼びかけることにしたのです」タデヨさんたちは、ヴィオレッタさんのような境遇の虐殺孤児が全員この村に戻ってくるができるように、これからも家造りを続ける覚悟です。

■加害者にとっての希望

このように、タデヨさんたちの“償いの道”は、より深く徹底したものになってきました。これほどまでに彼らを突き

動かしているものは何なのでしょう？家造りのお手伝いをした後、タデヨさんを含む3名の方々からお話を聞いていた時のことです。あるスタディーツアーの参加者が、「皆さんにとって将来の希望とは何でしょうか」と尋ねました。すると、元受刑者の方々は、それぞれに以下のように答えたのでした。

「今、この活動ができてることがとても嬉しい。これを子どもたちも見ている。自分たちが明日死んだとしても、この事実は消えない。これを子どもたちへの遺産として残すことが希望です」（エマニュエルさん）「私が彼女（虐殺孤児のヴィオレッタさん）の前に立っても恥ずかしくなくなり、彼女が私を前にしても怖がらないですむようになるのなら、私にはそれで十分です」（ベルナルさん）「この村に和解が実現することが目標です。1994年までは、みんな仲良く暮らしていた。その時の自分たちに戻りたい」（タデヨさん）



＜中央の女性がヴィオレッタさん＞

私は、彼らにとっての希望が、「将来こうなったらいいな」といった安直な願望ではなく、過去に真剣に向き合い、現在を真摯に生きる中で紡ぎ出されていることに感動します。加害者としてジェノサイドという過去に向き合うことは、どんなにしんどいことでしょう。しかし、そのことを通して初めて、彼らは“償いの道”を歩む決断へと導かれたのです。そして、被害者のための家造りという、きわめて具体的で骨の折れる活動という

現在の歩みが続ける中で、将来の希望を見出したのでした。

植民地支配と侵略戦争によりアジア諸国の人々に言い尽くせない痛みを負わせ、戦後においても誠意ある「償い」をすることで、過去を美化・肯定することによって被害者の方々の尊厳を踏みにじってきた日本の国民として、私たちはタデヨさんたちの取り組みから学ばなければならないと思います。

■「平和構築」専攻コースがスタート！

私が教員として関わっているピアス

(Protestant Institute of Arts and Social Sciences) の平和構築専攻コースは、第1期生6名（男性4名、女性2名）を迎えてスタートしました。学生数の少なさは、何か日本の神学部みたいですね。開発学部にも所属する3年生が79名ですから、確かにもう少しこのコースに来て欲しかったと思います。ただ、この国の学生たちにとって、「平和学」が未知の学問であることを考えると、全体の約8パーセントがこのコースを選択した事実を評価すべきなのかもしれません。

過去1ヶ月半この6人を対象に、ルワンダ国立大学からの客員講師と一緒に「紛争解決論Ⅰ」という授業を進めています。紛争分析の理論的枠組みと手法を学んできましたが、今後、学生たちはそれらを使って、ウガンダ北部、コンゴ民主共和国東部、イスラエル・パレスチナ、シリア、スーダン・南スーダン、メキシ



＜平和構築専攻第1期生の6人組＞

コの紛争を分析し、レポートにまとめます（ルワンダのことは授業で扱いました）。政府批判につながるような言論が制限されているため、なかなか単刀直入な議論ができないもどかしさがありますが、私が予想していたよりずっと率直に意見を言ってくれる学生たちに励まされています。

■コンゴ紛争が激化

4月以降、ルワンダの隣りにあるコンゴ民主共和国の東部で武力紛争が激化し、戦火を逃れるために27万人以上が避難生活を強いられています。表向きには、主にンタガンダという国際刑事裁判所に指名手配されている人物が率いる反乱勢力「M23」とコンゴ政府軍の間の戦争です。しかし、6月に公表された国連専門家グループのレポートには、ルワンダ軍がこの反乱軍に武器、弾薬、兵士（少年兵を含む）を提供していることが詳述されています。

カガメ大統領はじめ政府首脳は、ルワンダ軍と反乱勢力との一切の関係を否定していますが、7月21日、アメリカ政府は、この問題をを理由に、ルワンダに対する軍事援助の一部凍結（わずか20万ドルですが・・・）を公表しました。それに続き、オランダ、イギリス、ドイツといった国々が次々に援助凍結を表明し現在に至っています。ルワンダ現政権と軍事的に関係が深いアメリカ、そして、最大の援助国イギリスが援助凍結に踏み切ったのは初めてのことです。

以前も書いたことですが（「ウブムエ」16号）、ルワンダの都市部に見られる驚くべき発展のみに目を奪われることなく、この国の光と闇をしっかりと見据え、長期的な視野で、人々の平和と和解への歩みを支援していかななくてはなりません。

7月29日記

佐々木 恵

ささき めぐみ

新しい生活を楽しみにしつつ

ピース・インターナショナル・スクールも充実してきました。学びの環境のため、子どもたちの安全のため、お祈りください。

夏休みになり、日本の大学に行っている長女の萌と、ケニアの高校に行っている長男の仁が帰ってきて、ほぼ1年ぶりに家族5人が揃いました。にぎやかな生活に顔がほころぶ毎日です。ところが、子どもたちにとっては、今年は少し退屈な夏休みになっています。というのは、今まで仲良くしてきたアメリカ、カナダ、オランダからの宣教師家族が、ルワンダでの仕事を終えて、自分たちの国に帰っていかれたのです。私たちがここに来た6年半前からずっと一緒に育ってきた友人たちです。大学・高校入学を控えた子どもたちに、自国で教育を受けさせたいとの希望で帰っていかれたのです。子どもたちを通して交わりをいただいていた家族が帰られてしまい、本当に淋しくなっていました。



<久しぶりに家族そろって>

★夫婦二人でルワンダ生活

さて、この8月25日には、高校3年になる長男・仁の新学期が始まりますが、次男の共喜も同じケニアの高校に入学することになりました。私たちは、娘を一度先に日本に帰らせたあと、次男の入学

の手続きのためにケニアに2泊しますが、その後は和之と2人でルワンダに帰ってきて、以後、2人だけの生活になります。和之にとって、大学のあるブタレ（キガリの南方約130キロ）での仕事の比重が大きくなってきたことから、年末にもブタレへの引越しを考えています。住み慣れたキガリを離れるのは淋しいですが、また、新しい生活も楽しみです。ブタレには、「イエスの小さい姉妹会」という修道会があり、そこに、私たちの親しい友人の1人である日本人シスターがおられます。また、青年海外協力隊員も4人ほどいらっしゃいます。キガリに比べると小さい日本人コミュニティではありますが、それだけに交わりも豊かになるのではないかと楽しみにしています。

★ルワンダで一番のカフェ

ところで、ブタレには、「カフェ・コネクション」という名前のとってもおいしいコーヒーショップがあります。キガリにはワシントンにも支店のある「ブルボンコーヒー」というスターバックス顔負けのお店が4店舗あり、多くの外国人観光客や富裕層の人々でいつもにぎわっているのですが、このカフェ・コネクションはブルボンコーヒーよりずっとおいしく、またお値段も3分の1以下の400フラン（60円）と格安！煎りたて・挽きたてのコーヒーの甘い香りが店内にただよぶなか、アスムタという笑顔の素敵な女の子が、イタリア製のエスプレッソマシンで一杯ずつ丁寧にいれてくれます。1ヶ月半に1度ほど、スイス人のオーナー

自らが来て、ルワンダの選りすぐりの豆を自家焙煎しているのですが、私たちはこの豆をいつも買って、我が家でも最高のルワンダ・コーヒーを楽しんでいます。こちらに来られたら、ぜひお連れしたいお店の1つです。

★車窓からの眺め

共喜が夏休みに入ってからというもの、ブタレに行く機会も多くなったのですが、ピース・インターナショナル・スクール (PIS) はちょうどその途中のニャンザというところにあります。それで、PISニャンザ校に行く機会も圧倒的に増えてきました。それまでは地方行きのバスには乗り慣れないということもあり、ニャンザまで行くのは、大仕事のように感じていたのですが、慣れてしまえば1時間40分のバスの旅はさほど長くはなく、車窓の景色を楽しみながらあっという間に過ぎてしまいます。

キガリから西の地域は、地元で取れる瓦で屋根を葺いている家が圧倒的に多く、その肌色がくすんだような瓦の色が地面の赤茶色となじんで、とても落ち着いた風景を作っています。雨期明けの畑は羽毛布団のようにふっくらと耕され、バナナの林は緑の濃淡を作り出し、農民たちは、朝早くから畑に出てくわをふるっています。この地には、自然と一体となった人間の暮らしがまだまだあるのです。

★ニャンザ校の近況

さて、PISニャンザ校は2年目に入り、生徒数が去年の34名から急に120名に跳ね上がりました。日本国際飢餓対策機構「世界里親会」の教育支援を1月から受け始め、学費が無償になったことで、丘1つ越えた遠方からも生徒が来るようになったからです。担任は隣国ウガンダからの4人の先生方です。ルワンダは、3年前から教育がフランス語から英語に切り替わり、国内の教師ではその対応が十分にしきれない学校が多い中、PISはこの

4人の先生のおかげで、英語での授業が充実しています。10時にはお粥とパンの「おやつ時間」もあり、朝ごはんを食べて来られない子どもたちの栄養補強になっています。物価上昇のため、1袋(10個入り)500フラン=70円のパンでは高すぎると、このごろ創設者デニスさんのお連れ合いのダティバさんが、手作りパンを作るようになり、焼きたての美味しいパンを毎日食べられるようになりました。教室には楽しい壁面画が描かれ、丘の下にあるトイレまでは手すり付きの階段ができ、設備も少しずつ充実してきています。



＜日本から送られてきた絵本に感謝＞

現在の課題は、生徒たちの登下校の安全の確保です。学校は、幹線道路のすぐ下にあるので、子どもたちの多くは、その道路を横切らなければいけません。また、送り迎えは親が同伴することになっているのですが、親が農繁期で忙しかったり、遠方に住むために、バイクタクシーの運転手の後ろ座席にひとり乗って帰る子もいるのです。また、誰も迎えに来ないために、通りがかりのバスに乗せてもらい、最寄りのバス停でおろしてもらうように頼んだりすることもあります。これらの問題を解決するために、スクールバスとその運転手の確保、また、横断歩道やその横断補助員の設置など、生徒ひとりひとりの安全確保のためにこれらの充実が求められています。どうぞ、生徒たちの安全が守られますようお祈りください。

7月29日記

事務局からお知らせ

- 佐々木さんとリーチの活動が最近出版されたマンガ本で紹介されました！

『旅をしながら』みなみななみ 著 (いのちのことば社)

佐々木さんへのインタビューも掲載。書店や書籍通販で購入可能です。

●2012年 佐々木和之さん帰国報告集会

11月17日(土) 午後1時30～4時

恵泉バプテスト教会 〒153-0061東京都目黒区中目黒3-13-29 (駒沢通り・都税事務所隣り) / 東横線・中目黒駅より徒歩5分

●「佐々木さんを支援する会」主催

ルワンダ和解の現場・訪問ツアーのご案内

旅行日程 2013年2月25日(月)～3月7日(木)

現地での主な訪問先 虐殺現場となった教会、虐殺記念館、REACHの活動現場、償いの家づくりプロジェクト現場、ピアス、ピース・インターナショナル・スクール等

参加費用 35万円 (成田からの交通費、滞在費、食費、現地移動費を含みます)

※学生の方には「支援する会」から5万円の助成をいたします。

募集人数 12名

申込み締め切り 9月20日(木) 正午

別添えの申込み用紙に必要事項を記入の上、参加動機を添えて洋光台事務局宛にFAXにてお申し込みください。申込みの順番、参加動機、体力面などを考慮し12名のツアーグループを構成させていただきますことを予めご了承ください。

洋光台バプテスト教会 (蛭川明男牧師)

FAX 045-774-9859 TEL045-774-9861

- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求では ありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

- 佐々木さんを支援する会HP (ホームページ)

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。

HPから入会手続きも可能です。

佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 金子 敬 (古賀教会牧師)、蛭川明男 (洋光台教会牧師)、
村上千代 (日本バプテスト女性連合幹事)、吉高 叶 (栗ヶ沢教会牧師)

